

本による単語の種類

23B13068 三上颯大

東京工業大学 工学院

1. はじめに

授業では「地域や社会的属性の差によって、言語が多様な現れ方をすること。」を意味する変種という言葉について学んだ。そこで、本でも同じようなことが言えるのではないかということ考えた。本はそれぞれ筆者や筆者が書きたいジャンルが異なるため、本によって文体や語彙が異なるのは当然であるだろう。今回は本の語彙の量に注目し、ジャンルによる差異を考察してみようと考えた。

2. 方法

家にある本をジャンル別に調べて、それぞれ2ページずつ抽出し、使われている単語の種類別の数をまとめ、グラフにまとめる。その際、自立語のみを数え、文字数によって単語数の差が出てしまうのを防ぐために種類別の単語数をすべての単語数（自立語のみ）で割った値によって比べることにする。

3. 結果

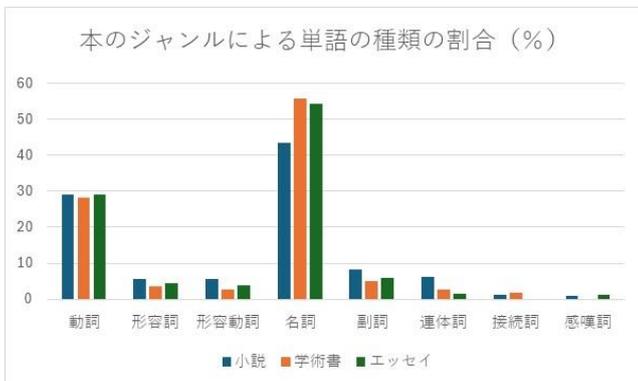
小説 村上春樹 (2012) 1Q84 新潮文庫

学術書 的場昭弘 (2022) 20歳の自分に教えたい資本論

エッセイ 鈴木信行 (2017) 宝くじで1億円当たった人の末路

	小説	学術書	エッセイ
動詞	74	62	54
形容詞	14	8	8
形容動詞	14	6	7
名詞	111	123	101
副詞	21	11	11
連体詞	16	6	3
接続詞	3	4	0
感嘆詞	2	0	2
単語数	255	220	186

割合を表したのが下図



- ・動詞の割合に目立った差は見られない
- ・修飾語の割合はすべてにおいて小説が最も高い
- ・学術書は逆に修飾語が少なく、名詞が多い

4. 考察

動詞の割合に差が見られないことについては意外な結果となった。文章に動きを感じられる小説が圧倒的に多いと感じていたが、その動きはその動きを支える形容詞や副詞などの修飾語によってもたらされていたことがグラフによってわかる。また、学術書には名詞、特に固有名詞が多く、非常に固く淡々とした文章に感じられた。やはり学術的な内容となると、修飾語によって筆者に想像させるよりも、名詞によって言い切ることで、確実に情報を伝えたいという筆者の気持ちが感じられた。エッセイも学術書と同じく名詞や動詞が多かったが、学術書でいう情報が筆者の菅家に代わっただけで、伝えたいものが明確になっている点では共通しているからなのかもしれない。

「形容詞を使わない 大人の文章表現力」という本では

形容詞は、会話の中で目の前の相手に自分の気持ちを伝えるのには適しているのですが、一見力が強いようで、自分の理論に閉じた弱い言葉です。自分の感じた気持ちを相手に詳しく伝えるのには適していないのです。(石黒 2018 p1,2)

とある。このことはまさに先ほど述べたことをあらわしているだろう。修飾語は想像しやすい反面、想像する内容を相手に委ねてしまうため、学術書やエッセイには向かないのだ。

5. おわりに

今回、ジャンル別の本の単語を分類し、その特徴について考察したが、しっかりそれぞれのジャンルで特徴が表れていて興味深い結果となった。小説というジャンルでもたくさん枝分かれしたジャンルが存在するため、より深掘った研究をしてみても、また新たな結果が得られるのではないだろうか。

文献

石黒 圭 (2018) 形容詞を使わない 大人の文章表現力
日本実業出版社